女神しか知らない恋の道!??

澪香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神しか知らない恋の道!??

【Ｎコード】

Ｎ５４７８Ｚ

【作者名】

澪香

【あらすじ】

平凡女子の天川奏と不良男子？の柳澤零が描く恋愛＋ＳＦ＋ファンタジーの学園ストーリーです

第一話　小さな出会い

キンコーンカンコーン

鐘の音が学校全体に響く

「今日は転校生が来てまーす」

加藤(かとう)先生は勢いよくドアを開けながら言った

先生が黒板に転校生の名前を書いている読んでみると柳澤零(やなぎざわれい)と書いている

「自己紹介よろっ」

「神道(かみどう)高校から来た愛沢零・・・です」

神道高校？聞いたことがある・・・

「神道高校ってあのヤバいくらい有名な？」

教室がザワザワしている

「静かに、零君は窓側の一番後ろの席ね！！」

うそ・・・私の隣じゃん殺されるって

さっき思い出したが神道高校は生徒のほとんどが不良で有名だった

「おまえ名前は？」

いきなり名前を聞かれた初対面なのにその言い方あり？

「あ・・・天川奏（あまかわかなで）で・・・です」

「あっそ」

聞いてきたのそっちだろ　あっそ　って何だ

零は席に座ると授業の用意をしている不良じゃないのか？？

一時間目は数学だった

「おいっ教科書を忘れたから」と言い手を出す

えっ私に言ったの・・・そりゃあ隣の席だしね・・・怖いよぉ

私は不良男子（零）に向かって目を合わせずに教科書を渡した

「ありがとう」

不良に感謝されたぞ・・・おいってかこいつ本当に不良か？？

「零ってやつ不良なの？？かなっち」

放課後になると静川結花（しずかわゆか）が質問してきた

「知らないよ　そんなの全く話してないし・・・」

「えぇ～十回は話してたくせに～」

確かに十回は話したっていうか話かけられたからしかたなく・・・

「まぁいいや　帰ろっか」

朝　学校へ行くときは雨が降っていたが今は晴れていた

「ねぇかなっち　神道高校ってお化けがでるらしいよ」

「えぇ～お化けもいて不良もいるって超ヤバいじゃん」

今日は私にとっては大きい出来事だったが世にとっては小さな出来事でしかなかっただろう・・・

第二話　女神に会っちゃった！？？

今日は晴れだった不良男子（零）に出会ってから晴れの日が続いてる

いつものように学校へ行く用意をしていた

異変に気づいたのは顔を洗ってるときだった

「そこの娘・・・ここはどこじゃ、冥界（めいかい）か天界（てんかい）か？？」

私はビックリして顔をあげると鏡には私の顔に似ている人がうつっている

「だ・・・誰・・・家には私しかいないのに・・・」

私は後ろを向く・・・誰もいない　ていうか冥界って何？天界って何

「わらわはアポロンじゃ　お主は・・・」

アポロン？冥界？天界？何それ？？？？？

「わ・・・私は天川奏・・・」

「奏？？もしやここは人間界（にんげんかい）か？？」

はぁ？？何だこいつ人間界？人間が住んでるのはあたりまえだろ

「人間じゃなかったらお前は何者なの！！」

「わらわは女神じゃ　天界の者じゃ」

天界の女神？？アポロン？？あれ？？ギリシャ神話で似たような事を聞いたことがあるぞ

私はふと時計を見る7時３５分

「ヤバッ、学校に遅れちゃう・・・」

アポロンだかも気になるが今は学校へ行かないと・・・

キンコーンカンコーン

学校の鐘の音が聞こえる

私は急いで階段を駆けている

２年生の教室は３階なので、もう息がハァハァしている

２年Ｂ組の教室の前に来るといったん止まって息を整えた

「遅れてすみません！！」

教室中に私の声が響きわたった

教室を見ると誰もいないように見えたがよく見ると一人の男子が学校の用意をしている

「よぉ奏お前も遅れたのか」

声でわかった不良男子の零だ

「しかたないじゃん！！いろいろあったんだから」

「女神に会ったとか？？」

え・・・何で知ってんの？？家には誰もいなかったし・・・

「なんでわかっ・・・そ・・・そんなことあるはずないじゃん・・・」

「やっぱお前　嘘つけないんだな」

へ？？もぅ意味わかんないよ・・・

「お前には女神が見えるんだろ」

？？まだ一人しか見たことないもん！

「まだ一人しか・・・皆みえるんじゃないの？？」

また口がすべった・・・

「皆みえるわけじゃねぇよ」

「何でそういう事しってんのよ」

あぁ言っちゃった・・・

「俺は小さいときから神や女神が見えるから」

第三話　零の秘密

「小さいころから神や女神を見ている!??」

なにを言ってるんだ・・・実際に女神とか神とか・・・まぁ見ちゃったから信じるしかないか

「どうして零は神とか女神とか見れるの?」

「俺は普通の人間じゃないから」

はぁ???普通の人間じゃない??だったらなんだって言うんだよ

「どんなふうに普通じゃないの??」

「まぁ簡単に言うと天界で生まれたから」

天界で生まれた?ただそれだけで神や女神が見れるのか!??

「俺は天界住人のアイリスと人間界の人間の間から生まれてきたんだ!!」

アイリス??なんだそりゃ??

「アイリスって??」

「アイリスは虹の女神だ」

虹??そういえば零と出会ってから毎日のように晴れている

しかも雨が降ったわけでもないのに虹が毎日のように出ている・・・

「じゃあ最近毎日のように晴れて虹が出ているのは、そのせいなの!?」

「まぁそうだけど・・・ていうか一時間目の体育ってさぼっていいの??」

「あっ!!忘れてた!!」

こうしてこの話は終わりになり雫の秘密も少し分かったので体育の用意をはじめた

第四話　女神について!??

「ねぇねぇなんで遅れたの??」

急いで体育着にきがえて校庭に出た私にむかって静川結花が言った

「ハァハァいろいろ・・・あったの」

走ってきたので息があらい・・・

「いろいろって何??」

女神を見たなんて言っても信じないよな・・・

「寝坊したの!!」

さぁ初めて嘘ついたよぉ結花・・・ゴメン・・・

「そうなんだ・・・って嘘ついてるでしょ顔にでてる!!」

「なんでわかっ・・・嘘なんかついてないもん・・・」

「やっぱり、かなっちは嘘がつけないんだ」

「うぅ・・・」

「いいよ、かなっちが嫌なら聞かない・・・」

涙目になった私にむかって結花は優しい笑みをむけて言った

「ゴメン・・・」

「いいよ気にしないから」

結花は小学校のころから優しかった・・・私があんなことになってもいつも見方でいてくれた・・・

それから昼休みになった・・・

「朝の話は秘密だからな！！」

後ろから声がした・・・零だ！！

「朝ってあの女神の話？？」

「それいがいなんかあったか？？」

そんな事いわれても・・・

「放課後にその話の続き話したいから残れよ」

えっさっきので終わりじゃないのぉぉ～

「う・・・うん、わかった」

放課後・・・

「よし誰もいないな・・・」

零は教室に二人しかいないのを確かめて言った

「なんでそんなに警戒してるの？？」

「冥界のやつが見てたり聞いてたらヤバいから・・・」

冥界・・・そういえば冥界についてはなんも聞いてないな・・・

「よし！！・・・じゃあ神と女神についての話からするか・・・」

「うん・・・」

「まず、神と女神は愛の力が源なんだよ・・・」

愛の力！？？

「なんで私には女神が見えたの？？」

「おまえに好きな人でもできたからじゃないのか？？」

好きな人・・・零・・・ちがうちがう

ピンポーンパンポーンみなさん帰りましょう

「あっ明日ね・・・」

はぁなんでこんなタイミングに・・・

第五話　奏の秘密？？？？

やばい、やばい、やばい何でこんなタイミングであんな事を思い出したの・・・

私は廊下を走っていると結花がすれ違った・・・

「かなっち？？どうしたの？？？？」

・・・結花ゴメンもぅ終わったことなのに思い出すと涙が止まらないんだよ・・・

「結花・・・こないで・・・・」

私の声は廊下に響きわたった・・・

学校を出るとさっきまで教室にいた零がいた

「どうしたんだ？さっきまで泣いてなかったのに」

「か・・・関係ないでしょ！！」

「幼稚園のときのか？？」

！！なんでこいつがその事をしってるの！？？

「そ・・・そうだよ・・・・」

もぅしかたないな・・・

「ちょっと昔の事を思い出して泣いてただけだから・・・そこどいてよ！！」

「ヤダね・・・」

「な・・・どくのもできないの！！」

「まだ話は終わってない・・・」

「そ・・・そんな理由で・・・」

「その幼稚園のときの事と関係があるんだよ！！！」

「はぁ？？何言ってるの？？？？」

私は泣きながらも話す・・・

「いじめられてたんだろ！！結花ってやつに・・・」

まっすぐに言わないでよ・・・

「あのときも今も結花は変わってない・・・」

「ど・・・どういうこと？？」

私は泣くのを我慢しながらも声はふるえていた

「あいつのなかには悪魔・・・お前のなかには女神がいるんだよ・・・」

第六話　あらたな不思議？？

零にあんな事を言われたが嘘だと思い零をおして走り帰った

家　５時１５分

「う・・・うぅぅ・・・」

私はあの事（いじめられてた事）を思い出すと自分が止められない

ピンポーン

今日は留守のふりをしようと思ったが何回もなってうるさいので
しかたなく出ることにした

ピンポーン　ピンポーン　ピンポーン・・・

私はドアを開けたそこには結花が立ってた

「なんかあったの？？かなっち？？男子になんか言われた？？」

結花は私のことを見ながら言った

「ゴメンちょっとね・・・」

私は作り笑顔でニコっと笑った

「そ・・・そう・・・」

結花は最後にこう言って帰った

しばらくするとまた・・・

ピンポーン・・・

さすがにもう泣きおわったので出た

「よっ、さっき結花きただろ」

零だった、こいつは不良男子と言われ友達があんまりいないやつだ

「そうだけど何？？」

「いやぁチャイム鳴らそうとしたら結花がきてさぁ・・・」

「きて？どうしたの？？」

「・・・ちょっと待て・・・」

零はそういって勝手に家にあがった

「ちょ・・・何勝手にあがってんのよ」

「いや、この家に魔法陣を使ったあとがかすかだけどあるから・・・」

そういうと零は何か呪文のように何かを言っている

「なんていってるの？？」

そう言ったが零は無視する

「・・・」

怒りようがない逆に言えば唖然していた零の周りには赤い何かがボッと出ている・・・

「結界か・・・」

結界って何？？あのアニメとかであるシールドみたいなの？？

「この家や、奏が普段つかってる物すべてに結界がはってある・・・」

何を言ってるの・・・誰がはったっていうの？？？

「だ・・・誰がはったの？？」

私はよくわからないがなんとなく質問してみた

「わからない・・・でもかなり強い魔術だ何年ももたない術なのに１０年はもってる・・・」

魔術！？？１０年？？さっぱりわからない

「奏の家族の写真ってあるか？？」

「え・・・あ・・・うん、あるよ」

お母さんはだいぶまえに死んでお父さんは仕事で大変だった

「これでいい？？だいぶ前の写真だ」

零にそれを見せると零はびっくりしているようだ

「どうしたの？？」

「こ・・・これはカオス殿！？？」

「カオスって誰？？お母さんは天川未来（あまかわみく）だよ」

「奏のお母さんは女神の中で一番最初の方なんだよ・・・」

第七話　裏切りと真実

「奏のお母さんは女神の中で一番最初の方なんだよ・・・」

私は零が言ってる意味がよく分からなかった

「よく分かんない・・・くわしく説明して！！」

「う~んくわしくって奏のお母さん《カオス》がセカイの始まりってことかな・・・」

お母さんがセカイの始まり？？

「まぁそのうち分かるから・・・そうだ鏡・・・鏡」

「なんで鏡さがしてるの？」

「あっあった　この鏡に奏の顔をうつして・・・」

「またお主か・・・まぁとりついてしまったからしかたがあるまい」

鏡にうつった私が言うっていうか顔とかちょっとちがう

「零・・・もしかして私にいる女神って・・・」

「そう・・・この方はアポロンって言って音楽，予言，弓矢，牧畜の神だ」

疲れて幻を見ていると思っていたこいつが女神だったとは・・・

「でもなんで私なんかに・・・」

「しらねーよ　そんなの遺伝子的にじゃないか？」

「お主らラブラブのとこすまぬがここから逃げたほうがいいのでは？？」

？？何を言ってるんだ？？

「いくぞ奏・・・」

そういうと零は私の手をグッとにぎって、外へ出て学校のほうへ走る

「零どうしたの？？なんでアポロンが言ったことで逃げてるの嘘かもしれないじゃん」

零の手が温かい・・・

「嘘じゃないかもしれないぞアポロンは予言の神でもあるのだから・・・」

「それは分かったから手　はなしてよ・・・」

私は顔を真っ赤にしながらあわてて言った

「俺の足の速さについてこれるならいいけどな」

そういうと零は手をはなす私は走るのをやめそうになったけど頑

張って走る

「学校だったら大丈夫だろ」

そういうと見覚えがない学校？？のなかに入っていった

「ま・・・待ってよ」

私は全力で走る零は階段をかけぁがり３－Ａの教室に入っていった

「な・・・なんでこんなところに逃げたの・・・」

「なんでって・・・ここは・・・」

零は言葉を中途半端にしながら真剣な目になった

「ミツケタ」

かすかに聞こえたロボットかのような感情のない声

「でてこいよ　悪魔」

零が教室中いや学校全体に響くくらいの声で言った

「悪魔って・・・」

「冥界のいや・・・地獄の住人じゃ」

私が片手に持っていた鏡にうつるアポロンが言う

「敵2人・・・女・・・女神いりと神と人間まざりの男・・・」

今度は女の声がした・・・聞いたことがある声

「敵は1人か・・・」

零が言った

「なんで・・・敵は2人じゃないの？？」

「いや、敵は1人じゃ悪魔は人間にとりつく」

「そう・・・もし悪魔が2人だったら悪魔がもう復活している事になる」

私の質問にアポロンと零が答えてくれた

「メガミ・・・カミ・・・コロス」

どこからか聞こえてくる声・・・

「ユカ・・・トモダチヲコロスケドイイカ」

「えぇいいわよはっきり言えば偽友だから・・・」

暗闇からゆっくりと出てくる1人の女

「ゆ・・・結花！？？」

「あぁ奏か・・・ゴメン前から嫌いだったんだ」

結花は満面の笑顔で言った

「う・・・嘘だよね・・・」

「嘘じゃねぇよ」

零が大きな声で言った

私の目には涙が・・・

「う・・・嘘だよ・・・ね・・・」

「さっき俺がお前の家いったときに結花が舌打ちしてたしな・・・」

零が私を説得するように言う

「そ・・・そんな」

「さっさとこんな人生を終わらせたいならこっちに来てすぐらくにしてあげるから」

結花はさっきから満面の笑顔だ・・・

「じゃ・・・じゃあ幼稚園のときの気持ちは嘘だったの？？」

「そぅ何年我慢してたと思ってんの？？まぁいいわさっさとはじめましょ」

「はじめるってなにを・・・」

私はもう泣いてなかっただって零やアポロンがそばにいてくれたから

「戦争を・・・戦争を始めましょう」

結花は不気味な笑い声とともに言い暗闇に消えていった

「奏・・・今からは戦いがはじまる・・アポロンは全く力が戻ってない・・・今から落としていいか」

零は真剣な顔で言った

「落とすって何を」

「とくかく目をつぶって・・・」

私が目をつぶると私の唇にはやわらかいなにかがあたっている

びっくりして目を開けると零の唇だった

「なんじゃ無理くりじゃのぅ零たしかに奏の好きな者はお主じゃが・・・」

「いいじゃないですか俺もあいつのこと好きなんだから」

「まぁいい話はあとじゃ」

私(アポロン)の頭には天使の輪のようなものがあった

「おぉこんなキス一回でこんなに力が戻るとはお主は天才じゃなぁ」

「うるさいな・・・ゼスと呼べゼスと・・・」

「ほぅお主はゼウス殿の子ではないか！？」

「そうだ・・・」

「あら神々どうしのお話中ですみませんがもぅはじめていいかしら？」

「あぁ臨むところだ！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5478z/

女神しか知らない恋の道!??

2011年12月25日14時46分発行